

訳書紹介

ジル・ドスタレール，ベルナール・マリス著，齊藤日出治
訳『資本主義と死の欲動——フロイトとケインズ』
藤原書店，2017年11月刊

フロイトとケインズで読むグローバル資本主義の危機

齊藤 日出治[†]

■なぜ人類はみずからの手で危機を招くのか

人類は死を望んでいるのではないか——本書は，フロイトとケインズが遺したこの不気味なメッセージを手がかりにして，二一世紀に進行する資本主義の破局的な危機を読み解こうとする。資本の価値増殖の運動を全開させグローバルな経済成長をひたすら追求するこの世界は，たんなる経済危機の次元を超えて，社会と自然に破局的な事態をもたらしている。しかも，その危機におののき悲鳴を上げながら，なおもその危機に向かって突進しようとする，この衝動はいったいどこに起因しているのか。本書は「死の欲動」というフロイトの精神分析の概念をもってこれに答えようとする。

フロイトは生の快楽を追求し苦しみを避けようとする「生の欲動」にもとづいて精神分析を進めていたが，それでは説明のつかない精神病理現象に直面し，晩年になって「死の欲動」の概念を提唱し，この二つの欲動の対抗関係を通して精神病理現象をより深く解明することができるように考えた。「死の欲動」とは，生が出現する以前の無機物にもどろうとする衝動である。この自己の内部における原初の無機の状態へと向かう欲動が「生の欲動」を通して外部に向かうとき，それは他者や自然に対する攻撃的行動となる。人間は，生来，「生の欲動」の背後に，他者を攻撃し自然を破壊するという残酷性へと向かう衝動を押し隠している。つまり，人間の攻撃的で破壊的な性向は，「生の欲動」によ

[†] 大阪産業大学 経済学部 元教授

草稿提出日 11月10日

最終原稿提出日 11月10日

て制御されているように見えながら、「生の欲動」を通してひそかに増幅し肥大化していくのである。「生の欲動」は「死の欲動」を支配し利用しみずからに従属させて発展を遂げようとする。だが、この「生の欲動」の発展過程は同時に、「死の欲動」を先送りし迂回させる回路にもなる。この回路を通して、「死の欲動」はひそかに自己を増殖させ、巨大な暴発力を秘めたものへと成長していく。

■ 「死の欲動」と「生の欲動」の対抗関係として経済活動を読む

フロイトは、文化が「生の欲動」と「死の欲動」との対立関係という危うい均衡のうえに成り立つと考えるが、同時に、経済活動をも、この二つの欲動の対抗関係が運動する過程として読み取ろうとする。本書が着目するのは、このフロイトの着眼である。生産、消費、貯蓄、蓄積といった各種の経済活動が、こうしてこの二つの欲動の緊張関係において定位し直される。生産活動、さらには資本の蓄積活動は、目の前の直接的消費を断念し、快楽を引き延ばし、それを将来に迂回させることである。生産手段の生産は直接の快楽の享受を断念し、迂回させて、将来により多くの快楽を得るための廻り道の行為である。経済活動はそうにして技術革新と生産性の上昇をめざし、この迂回路を拡大させていく。だが、この迂回路は、同時に「死の欲動」を増幅させる回路にもなる。それは、ひとびとの憎悪や怨恨や模倣欲望や相互の不平等を累積し波及させる回路にもなる。投資の活動は、直接的消費を断念して将来により多くの消費を可能にするための活動であるが、この活動が同時に、「より多くの将来の破壊のために現在の破壊を延期すること」であり、「もっと後になってより巨大な力でもって死の欲動を実現するために、今日における死の欲動を制限することなのである」（邦訳書46～47頁）。

文化も、経済活動も、「生の欲動」を外部の環境に対応しつつ制御可能なものにしていく過程（フロイトはこれを「現実原理」と呼ぶ）であるが、同時にその活動が自然と人間に対する破壊的な暴力を蓄えその暴力を発現させる過程となる。この視点からすると、新自由主義の規制緩和の過程とは、市場競争のエネルギーを無放縦に解き放つことによって、「死の欲動」を内部に深くため込み、内部に蓄えたその力を暴発させるリスクをたえず高めていく過程となる。

フロイトは二〇世紀における二つの世界戦争のうちに「死の欲動」の発現を読み取ったが、二一世紀初頭の今日、わたしたちは、戦争とテロリズム、原子力発電事故、地球環境危機、核戦争の危機というすがたをとった「死の欲動」の発現に遭遇しているのである。

■資本主義の破局的危機を前にして

ケインズは、貨幣を自己目的として追い求める黄金欲望のうちに、フロイトの「死の欲動」を見て取る。ケインズにとって、黄金欲望という到富衝動は、「死の欲動」とらわれ生の享受を否定して生きる精神病理的症状であり、私益のために社会を破壊する犯罪的な行為であった。

さらに、この貨幣の追求に奔走するひとびとは、個性性を失って集団感染する模倣欲望にとらわれた集合的存在となる。ケインズが美人コンテストの投票行動の事例を引いて巧みに説明するように、株式市場とは、ひとびとが自己の理性的判断に依拠して行動する場ではなく、他者の判断を見抜こうとするゲームに参加する場である。そこでは、集団における平均的な判断を見抜いた者がゲームに勝利する。

この模倣欲望から脱してひとびとが個性性を獲得するためには、黄金欲望の追求のように現在の快の追求をたえず先送りし永遠の未来へと快を追放し続ける経済活動から脱しなければならぬ。明日のことなど少しも気かけずに、この時間を、この一日を充実させ、「物事のなかに直接のよろこびを見いだすことができる人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人」こそ、真に個体的な存在なのだ、ケインズはそう言う。

だが、ケインズは黄金欲望を厳しく非難し、黄金欲望にとりつかれた金利生活者を安楽死させ、貨幣欲望から解放された世界を望んだにもかかわらず、黄金欲望が社会の富の増進にとって欠かすことのできないものだと言主張し、貨幣欲望をいわば利用して貧困を克服し人類の自由を実現する道を構想していた。ケインズは、フロイトと同様に、「死の欲動」のエネルギーを利用することによって「生の欲動」を昂進する道を探ろうとしたのである。その意味で、われわれはケインズの経済理論と経済政策のうちにフロイトの欲動論の経済学的展開を読み取ることができる。

だが、ケインズが一〇〇年後の孫たちに託したこの希望は、はたして満たされることになるのであろうか。今日進展するグローバリゼーションの破局的危機は、明らかにケインズの希望を裏切っている。黄金欲望という「死の欲動」を制御し利用して「生の欲動」の解放をめざそうとしたケインズの思惑は外れ、その逆に、「死の欲動」のほうが「生の欲動」を利用して猛威を振るい、「生の欲動」を滅ぼしつつある。ケインズが安楽死させようとした金利生活者は、死滅するどころか、金融派生商品の投機的取引、不動産取引を通して世界中にはびこり、産業資本家による産業利潤を遥かに上回る巨額のレント（不労所有）を手に入れている。グローバリゼーションと世界金融危機は、ひとびとに経済的必要性から解放された生の享受をもたらすどころか、ひとびとを貧困と暴力の渦に巻き込み、ひ

とびとの人間関係をずたずたに切り裂いている。

フロイトの危惧がいまほど切実になったときはない——著者たちはそう言う。「死の欲動」に突き動かされた攻撃的暴力が「生の欲動」を圧倒して噴出する資本主義の破局的危機にどう向き合うべきか。人類は資本主義と手を切ることができるのかどうか。それは人類と地球の存亡がかかる重大な問いである。

(さいとう・ひではる／元・大阪産業大学経済学部教授)

追記：

この紹介文は、筆者が邦訳書の末尾に付した「訳者解説」を元にして、藤原書店編集部の中屋琢氏に要約していただき、さらに筆者が手を加えてできあがったものである。ご協力いただいた中屋氏に記して謝意を申し上げる。